新潟県租税教育推進協議会長賞　佳作

当たり前の価値

新潟県立長岡高等学校
二年　近藤　うた

「人を助ける」

何ともシンプルかつ良い聞こえがするこの言葉。人として当たり前であり、良い行為だと誰しもが思っている。現在社会では、たくさんの人達が様々な分野で「人を助ける」ことを職業としている。直接的でも、間接的でもその職業たちはどこかで誰かの生活を良い方向へと動かし、彩っていく。そして、その職業や社会の支えとなっているものが税金である。

私の父は消防士だ。父は休みの日でも非番召集がかかり出勤することも珍しくない。家にいないことが大抵の日常だ。いつでも現場に駆けつけ、消火する。つまり、当たり前のように人を助ける職業。消防士と聞いて多くの人はこのようなイメージを抱くだろう。私もそのうちの一人であった。勿論、父の職業に税金が関わっていることなど知らなかった。

ある日、授業で税金についてのビデオ鑑賞を行った。その時、衝撃を受けた。なぜなら、もし税金が無くなったら、消防も警察も当たり前のように動かず、道路も整備されず今とはかけ離れた暮らしになるという構図を目の当たりにしたからだ。当たり前だと思っていた生活は税金によって成り立っていた。その時、初めて税金のありがたみを感じた。税金とはどうして払うのだろうかと疑問に思っていた。しかし、その分自らの日常の中の多くの場面で支えてもらっていることを知った。当たり前のことだと慣れてしまうことは生活が豊かであることを意味し、逆に言えば、感謝を忘れ、その行動の価値を見失ってしまっている。この鑑賞の時間を通じて、税金の価値を実感し、人間としての義務をしっかりと果たそうと思えた。

その衝撃を実際に現場に行く身である父に話してみた。すると、「みんなからの税金があるからこそ消防は人を助けられる。それに恥じない行動をしなければいけないと思っているよ。」と、言った。普段の家にいる父とは違う一面が垣間見えた。市民からの税金により公共サービスを行っている立場としての自覚がしっかりとあるのだと感じた。公共サービスなどが行われるために市民から税金が支払われ、それに恥じない姿勢で市民を助けるという形で還元する。このような互いに助け合う仕組みが社会に存在していた。知らず知らずのうちに私はその一員として誰かのために税金を通じて貢献していたのだ。それは、義務であり当たり前のことである。しかし、社会に貢献するという誇りある行動であった。

当たり前の裏には必ず誰かの行動・思いがある。納税も今の当たり前の社会を支える大きな一因である。私達は、税金を支払うことによって、万が一の場合に助けてもらえるという信頼・保障を買っているのだ。税金により平穏な毎日を過ごせていると言っても過言ではない。